

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5 月 31日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720037

研究課題名（和文） 『ひですの経』の原典的研究

研究課題名（英文） The Textual Study of "Fides no Qvio"

研究代表者

折井 善果（ORII YOSHIMI）

慶應義塾大学・法学部・講師

研究者番号：80453869

研究成果の概要（和文）：本研究は、2009年にハーバード大学で再発見された日本イエズス会版（いわゆるキリシタン版）『ひですの経』を原典的視点から研究した。三年間の主な成果として、a)『ひですの経』校注本（教文館・2011年）、b)ファクシミリ版（八木書店・2011年）を刊行し、さらにc)文献学・書誌学・近世初期東西異文化交流・思想史学における『ひですの経』の意義を国内外に広く公開した。

研究成果の概要（英文）：This project involved the textual study of "Fides no Qvio", a unique book published by the Jesuit Mission Press at Nagasaki in 1611 and rediscovered in Harvard University in 2009. The main results of this project were a) the publication of the transcription of the whole text with annotations (Tokyo, Kyobunkwan: 2011); b) the publication of the facsimile version of the original (Tokyo, Yagi bookstore: 2011); and c) other types of dissemination outside of Japan (including conferences) of the book's significance for philological and bibliographical studies, as well as for the study of intellectual history of cultural transmission in the early modern era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、思想史

キーワード：思想史・東西交渉史・キリシタン史・異文化接触論・出版文化史

1. 研究開始当初の背景

近世日本キリシタン史は、貿易史・法制史の分野で進展を見せ、1960年代の欧文（西・葡・羅・伊）原文書の公開以来、その調査と翻訳を主とした研究が進んでいるが、思想史としての研究は、姉崎正治『切支丹伝道の興廢』（1930年）ら戦前の研究者を超える研究

は出ておらず、「殉教の栄光の歴史」あるいは「日本史上の特異な一現象」として扱われてきた。

その理由の一つとして、これまでのキリシタン思想史研究が概して、キリスト教側を創造論的・超越的世界観、それに対する日本側を生成論・連続的世界観という固定された前

提に立ち、その比較対象を主眼としてきたからであると考えられる。申請者の研究もこういった前提から出発するものであったが、その後行ってきたキリシタン宗教文学の原典と日本語訳との対照研究の結果は、その前提自体の再検討を促すものであった。つまり、教義書の翻訳という知的作業が、相方に存在する類似の思想に気付かせ、己の思想の“客体化—Juxtaposition”の機会を結果的にあたえているということであった。このことは、キリシタン思想史が、「日本人はキリスト教をどのように受容したか」「カトリック教会はどのように日本にキリスト教を伝えたか」ではなく、むしろヨーロッパと日本（東アジア）との出会いによって生じた「混沌とした接続の在り方自体」を問うべきであるという、研究前提の転換を促した。

そのような中で、2009年7月、ハーバード大学ホートン図書館において新資料『ひですの経』が本課題研究代表者の折井によって再発見された。同書は1907年ドイツの古書店商P・ゴッツシャルクの売り立て目録に、表題紙と本文半丁のみが紹介されて以来、内容不明のまま所在が分からなくなっていた世界に唯一の孤本であり、本事業の採択によってその内容を広く公開する機会に恵まれることとなった。

本事業採択以前の事前調査では、これはすでに知られているローマ字版『ヒイデスの導師』（オランダ・ライデン図書館蔵）を漢字かな混じり文にしたものではなく、スペイン人ドミニコ会説教師ルイス・デ・グラナダの別著作『使徒信条入門』の第一巻（*Primera parte de la Introducción del Símbolo de la fe, 1583*）の翻訳であることが分かった。内容は概して、人間を含む被造物世界の秩序と美の観察・観想により創造主デウスの存在を目的論的に証明するものであり、申請者がこれまで注目してきた「自然」「偶然」という概念の翻訳をめぐる両思想の翻訳の錯綜の事例がより詳細に、より多くの事例を用いて示されていた。

申請者は引き続き、対訳分析という方法（翻訳に使用された語彙の比較、削除・加筆された教説の指摘）によって、当時のいわゆる“カトリック＝キリスト教”と“日本思想”の混沌とした接続の在り方自体を問うことにより、東西の思想的揺籃期の解明がなされると考えた。このことはまた、対訳分析の前提となる、文献学的・史料学的調査についても、積極的に研究成果を提示することの必要性を惹起した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記『ひですの経』を原典的視点から研究することにある。具体的には、まず、(1) 翻訳に使用された欧文原典を

特定する文献学的調査と、(2) 翻訳者・校閲者自身が記した書簡・報告等の歴史史料の調査をふまえる。それに基づいて(3) 原典と日本語版の対訳分析を行い、翻訳に使用された語句表現や削除加筆された教説の存在とその理由を、16-17世紀のカトリック＝キリスト教と日本の思想史的コンテキストの中で考察する。

これらの目的を達成しすることにより、同書に『どちなきりしたん』『太平記抜書』等重要文化財と同様の価値を提唱し、日欧・東西思想交渉史における『ひですの経』の意義を内外に公開する。

3. 研究の方法

本研究の方法は、対訳分析、すなわち翻訳に使用された語彙表現の比較、削除・加筆された教説等を実証的に指摘することである。当時のいわゆる“カトリック＝キリスト教”と“日本思想”の混沌とした接続の在り方自体を問うことにより、東西の思想的揺籃期の解明がなされると考えられる。

4. 研究成果

三年間の主な成果として、『ひですの経』校注本（教文館・2011年）とファクシミリ版（八木書店・2011年）を刊行した。これらに掲載した釈文・校註・解説に、研究成果の大部分は公開されている。上記の「研究の目的」に照らし合わせて三点、またそれ以外の、研究の過程で新しく考察された事項を二点、以下に指摘する。

(1) 翻訳に使用された欧文原典を特定する文献学的調査とその結果

原典『使徒信条入門』は、第四巻までが合冊となって1583年にサラマンカの印刷所Los Herederos de Mathías Gast からフォリオ版で出版された。その後バルセロナ、マドリッドを中心に大量の版を重ね、その数は日本に船載される期間を差し引き、1609年までのスペイン語版に限ってみても25版が数えられている。1585年にはベネチアからイタリア語版、86年には同じくベネチアからラテン語版が出版されている。

これら諸版のうち、翻訳に使用されたのがいずれであったのかについて、可能な限りの版を調査した。翻訳に使用された底本を特定する、すなわち対訳分析を可能とするには、論理的にはこれら全ての版を『ひですの経』と比較しなければならない、という困難が伴う。しかし、1906-1908年にルイス・デ・グラナダの校註本全集を出版したJ・クエルボの研究から、スペイン語版の中での、あるいはラテン語動詞同士の初版の異同に関して、すでに明らかにされている点があったため、

底本の特定につながる可能性のあるそれらの情報をまずは整理した。

まず、スペイン語諸版の異同についてである。原著者ルイス・デ・グラナダは、1583年に初版が印刷された後ただちに、印刷の工程で生じた植字工の誤りをみずから18箇所指摘し、イタリア語に訳されるのを見越してそれらの誤りが直されることを希望し、印刷所 Los Herederos de Mathías Gast に願い出ている。この要望に従った訂正は初版の翌年、1584年サラマンカ版ですでに適応されており、その後の版にも適応されている。また以上の理由から、1583年に出版された初版の現存状況は、1584年版に比してきわめて少ない。

また、同印刷所は、初版の出版にあたって、教皇グレゴリオ13世からラテン語の推薦文を取り付け、巻頭にスペイン語訳を付して挿入することによって、その正統性を表明している。この推薦文とその訳文は、初版以降オクタボ版の一部を除いた全ての版に掲載されている。

上記のような印刷所マティアス・ガスト一家とルイスとの懇ろな信頼関係や、欄外注記・注釈のない文庫本（オクタボ版）サイズを翻訳に使用することの不自然さなどから、本研究では暫定的に、1583年初版本を底本としながらも、クエルボの指摘する校訂箇所に着目しているウエルガの校注本（1996年）を主に使用することとして分析を続けた。

一方、『ひですの経』の作成にはスペイン語版が使用された痕跡がみられるものの、ラテン語版が使用された形跡も否定できないという研究結果が提示された。

たとえば『ひですの経』4丁裏で引用されている「さるも62」すなわち詩編62編は、内容としては26なので表記が誤っているのだが、サラマンカの Los Herederos de Mathias Gast 版（1583年、1584年、1585年）、その後継である Cornelio Bonald 版（1588年）、同じくサラマンカの Guillermo Foquel 版（1590年）、バルセロナの Jaume Candrot 版（1597年）なども同じ誤りを犯している。

一方ラテン語版はベネチア版（1586年）、ケルン版（1588年、1602年）はすべて「26」と正しい表記がされている。62と26の違いなど単なる誤植である、というよりは、スペイン語底本の誤りを踏襲したと考える方が自然ではないであろうか。同じような誤植に因んだと思われる事例は4丁裏、1. Coint. 9. すなわちコリント人への手紙第一の9章にもみられる。

また、動植物やヨーロッパの地名を翻訳する際には、以下のようにスペイン語版からの音訳を採用していると思われる例が多い（例：「ペルぢす」「(西) Perdiz」「(羅) coturnix」、「あらからん」「(西) Alacrán」「(羅) scorpio」など）。

一方、スペイン語版だけでなく、ラテン語版が参照された痕跡も否定できない。以下の「りべれよ」はそのことを示唆する。

（ひですの経）先りべれよといふは、長高く美しき犬也。彼ハ心猛く力強くして、如何なる恐しき獣にもほへかゝり喰ひ付也。

（スペイン語版） hay lebreles de hermosos cuerpos y generosos corazones que acometen a las fieras;

（ラテン語版） Adsunt enim venatici, crasso & pulchro corpore, & forti animo, qui feras aggrediuntur:

これら三者を比べてみると、ラテン語版（先述のベネチア版（1586年）、ケルン版（1588年、1602年）いずれも同様）の crasso（体格のよい、大きい）が『ひですの経』には「長高く」と翻訳されているのに対し、スペイン版ではそれに相当する言葉がない。

以上のように、スペイン語・ラテン語いずれも使用されたことを示す例があり、底本を一つに限定することはかなわなかった。しかし今後の課題として残された、これらテキスト・クリティーク作業の継続は、翻って、極東日本に派遣されたヨーロッパ人宣教師の言語感覚や運用能力の解明に関する新たな実証的方法論として提示された。

以上の詳細は、教文館の校註本（2011年）に掲載した折井による解説に発表されている。

また、1607年には、マニラのビノンドク印刷所において、ドミニコ会サント・ドミンゴ修道院長のドミンゴ・デ・ニエバ編により、同じドミニコ会のトマス・マヨールが『格物窮理便覧』の名で漢訳木版を出版している。同書はウィーン国会図書館、イエズス会ローマ文書館、ライデン大学図書館が所蔵しており、『ひですの経』の内容や語彙との比較研究も今後の課題として残された。

(2) 翻案の成立時期にかかわる歴史史料と「断簡」の調査結果

『ひですの経』の刊行年は表題紙に1611年（慶長16年）と明記されているが、イエズス会士ディオゴ・デ・メスキータは総長アクアヴィーヴァ宛て1612年3月18日の書簡では、印刷が進行中であること、また1613年11月9日の書簡で、印刷が終わったばかりである、と述べられている。これは天正少年使節の一人原マルチノが国字キリシタン版『こんてむつすむんぢ』（1611）の改訳を行っていたこと、また『ひですの経』の翻訳を「助けている（ayuda）」と述べていることで既に知られた書簡である（ローマ・イエズス会文書館蔵）。

これに関して、『ひですの経』に付記された出版認可状 (Licença) に、同書に何らの教義的誤謬がないことを校閲者の立場から承認する人物として「マルチーニョ・カンボ (カンボは“原”の意)」の名があることが注目された。出版認可状とは、教会の管轄区内の権威者 (例えば日本の場合は日本司教となる) が、信仰的・道徳的に誤りがないことを校閲者に確認させたうえで証明するもので、キリシタン時代においては、とりわけ司教の秘書が校閲者の職にあっていた。キリシタン版の校閲者として司祭原マルチノの名前が記された『ひですの経』のケースは、キリシタン版の翻案作成における「校閲者」の存在に光を当てたものである。

さらに、翻案作成の過程を伺うことのできる貴重なデータが提示された。ファクシミリ版の釈文・解説に全面的に協力してくださった豊島正之氏により、『ひですの経』裏表紙の芯に、補強紙として「断簡」(内容が『ひですの経』8丁表の上部と8丁裏に相当するものの、刊本の同丁とは語彙や文体が大幅に異なる一丁)が発見されたことである。これによって『ひですの経』の製作工程で大幅な改稿・改版が行なわれていたことが判明した。

この「断簡」の存在によって考察されるのは以下の点である。まず、出版年(1611年)と上記の書簡の示す時期との不一致は、この改訳にかかった時間と関連しているということである。「断簡」が改稿以前のものであり、刊本が改稿以後のものである、と特定することには慎重を期しなければならないが、このような改稿作業が、表題紙の刊行年と実際の作業時期とのずれに何かしら関係がある可能性が指摘できる。

また原マルチノはあくまでも「校閲者」として名が記されており、「翻訳者」であったとはいえないのではないかと、という諸研究者の意見に対して、「断簡」の存在は以下のような仮説を惹起する。つまり、マルチノはすでに何者かによってなされていた草稿の改訳過程に関わったが、それはあくまでも改訳や校正であり、認可者であることと矛盾しないと考えられたのではないかと。

次に指摘されるのは、翻訳底本の特定に関する新たなデータである。『ひですの経』本文の該当部分と対照すると、トマス・アクイナス『神学大全』の内容をまとめたラテン語表記が「断簡」には存在しないことが注目される。また刊本の音訳表記「ぴりももうべる」が、「断簡」では「ぴりいむんもうびれ」とわざわざ訳しなおされていることも注目すべきである。前者はスペイン語の primer movedor、後者はラテン語の primum mobile に近いことから、刊本はスペイン語を参照して翻訳され、「断簡」はラテン語を参照して翻訳された、というように、翻訳が二言語を

使用して行われた可能性を強く示唆している。

これら『ひですの経』の翻案の成立過程にかかわる調査結果は、キリシタン版の翻案から印刷・出版に至る過程を解明するための貴重な事例になると思われる。

以上の詳細は、八木書店のファクシミリ版(2011年)に掲載した折井による解説に発表されている。

(3) 欧文原典と日本語版の対訳分析とその結果

次に、キリシタン版を、日本人のキリスト教受容の実態の解明のみならず、当時のヨーロッパ(イエズス会)の思想的動向をうかがい知るテキストとして検討することの必要性が提唱された。

そこで明らかになったことの第一は、トリエント公会議(1543-63)を前後するヨーロッパのルネサンス人文主義の影響である。同会議では、人が義とされるのは信仰のみではなく、人間側の自由意志による修徳的な働きかけにもよると決議された。これは極めて人文主義的な見方であるが、キリシタン版への翻訳に際して、このような倫理・道徳に関する教説が敷衍・増補されているという傾向が『ひですの経』の内容的分析では注目された。

また、当時イタリアを中心に盛んであった新プラトン主義の代表的著作家(フィチーノ、ポンポナッツィら)の、霊魂(アニマ)に関する言及が、キリシタン版において名前を伏せて引用されている事実も明らかになった。また、対訳分析の過程で、自然と意志のアウグスティヌス的結合を説く「愛(キリシタン用語では“あもる”)」についての言及や、徳そのものを礼賛するキケロの立場からポンポナッツィによって批判された考え方である「来世賞罰」についての言及などが、グラナダの原典にはなく、『ひですの経』の翻訳に至って付加されていることが明らかになった。

以上のことは、従来「アリストテレス・トマス」の枠組みで一枚岩的にとらえられがちであった当時のイエズス会の知的背景の理解に再考を促す一事例となった。

さらに言うならばこれらの事実は、ヨーロッパから日本への「受容」という一方向のみから論じられてきたキリシタン思想史の在り方に対して、当時の来日イエズス会士が置かれていた、ヨーロッパの複雑な思想的状況を逆照射した、「動的な」テキストとして読むことの重要性を提起した。

(4) キリシタン版の「再発見」の可能性と必要性

本研究課題は『ひですの経』に特化するものであったが、結果的に、そのほかのキリシタン版の「再発見」の可能性を指摘することにもつながった。世界中に散逸するキリシタン版の中には、ヨハネス・ラウレス (Johannes Laures, 1891-1959) の没後、所蔵が一度も確認されずに現在に至っているものが多くある。この半世紀の間に個人の所蔵者が没し、行方不明になっていたことが気づかれずに、突然海外の大学のデータベースでヒットするという、『ひですの経』と類似した事実が確認された。

具体的には、アメリカ、スペイン、オランダにおいて各一件、ラウレス以来包括的調査が途絶えていた、所蔵先の移動の軌跡が明らかになった(うち一見は、2013年3月現在再び行方不明となっている)。海外におけるキリシタン版の所在が散逸する危険性を回避し、日本の文化遺産保存の一助となったと考える。この更なる作業は、平成25年度より2年の期間で内定を得た、科研費新規課題(若手B)において継続の予定である。

(5) キリシタン写本群とその欧文原典の特定に益する研究の進展

キリシタン版には、ヨーロッパで出版されていた著作某の翻訳であることが序文に明記されているとは限らない。したがって、翻訳原典自体を探し当て、原典との引き当て作業が可能になる文献を見つけること自体が、当該分野の研究にはますます重要になってきた。

このことは、本研究課題の進行とほぼ歩を合わせて認知されるようになってきた感がある。2012年に発表されたS・マウゴジャード氏の論文「東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』の成立について」(『国語国文』81-6)はその代表例である。氏の研究によって原典的研究の対象がキリシタン写本にまで拡大されたことは喜ばしい。この成果に触発され、先行研究をあらためて精査したところ、すでに知られているキリシタン写本である、通称「バレット写本」(1591頃成立、原本はバチカン図書館蔵)が、上述のグラナダのラテン語説教集『祝日の説教集』(全4巻、1575-1580)および『諸聖人の説教集』(全2巻、1578)の構成に酷似していることを考察した。これら東西両文献の影響関係についての更なる実証的裏付けは、平成25年度より2年の期間で内定を得た、科研費新規課題(若手B)において継続の予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① ORII, Yoshimi, *Discourse analysis on the "Immortality of the Soul" in the Christian Mission in Japan during the 16th and the 17th centuries*, European Association for Japanese Studies (EAJS), 2011年8月27日, タリン大学(エストニア)
- ② ORII, Yoshimi, *"Fides no Qvivo (1611)" from the Jesuit Mission Press and its preservation in E. G. Stillman's collection in Harvard University*, European Association for Japanese Resource Specialists, The 21st International Conference, 2010年9月4日, Palazzo Rosso (ジェノバ、イタリア)

[図書] (計5件)

- ① ORII, Yoshimi, *Redescubrimiento y análisis de la versión japonesa de "Symbolo da Fee o Fides no Qvivo" (1611) de fray Luis de Granada*, María Jesús Zamora ed. *Japón y España: acercamientos y desencuentros (siglos XVI y XVII)*, Madrid: Editorial Satori, 2012, 354pp. (165-178)
- ② 折井善果「キリシタン版『ひですの経』の「アニマ」論が意味するもの」加藤信朗監修、鶴岡賀雄・桑原直己・田畑邦治編『キリスト教と日本の深層』オリエンツ宗教研究所、2012年、302頁(115-133)
- ③ 折井善果編著『ひですの経』2011年、教文館、244頁
- ④ 折井善果・白井純・豊島正之校註『ひですの経』八木書店、2011年、392頁
- ⑤ 折井善果著『キリシタン文学における日欧文化比較 - ルイス・デ・グラナダと日本 -』2010年、教文館、308頁

[その他]

報道関連情報:

2012年5月16日読売新聞・文化面「ひですの経 内容判明」

アウトリーチ活動情報:

折井善果「『ひですの経』の内容が意味するもの—アニマ論を中心に」教文館・八木書店主催『ひですの経』影印・翻刻刊行記念講演会「16-17世紀の日本におけるキリシタンと出版一新出! 天下の孤本からわかること」(2012年1月22日、於教文館ウエインライトホール)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

折井 善果 (ORII YOSHIMI)
慶應義塾大学・法学部・講師
研究者番号： 80453869

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし